

沖縄県の遠隔地及び離島における医療、療育、 福祉の連携についてのアンケート調査

落合靖男

1) はじめに

沖縄県は乳幼児検診、1歳6カ月検診、3歳児検診の事後指導として各保健所内に発達クリニックを設置し、訓練の必要な乳幼児には地域の訓練施設に紹介している。訓練施設のない遠隔地域（北部地区、宮古諸島、八重山諸島）には保健所内に統合療育外来として訓練スタッフを派遣して巡回療育訓練を実施してきた。

昨年は沖縄県の心身障害児の医療、療育、福祉の連携状態について3つに分け（A群：都市型、B群：遠隔型、C群：離島型）比較検討した結果、A群ではスタッフ、療育内容、福祉共充足している。B群では定期巡回療育が主であるが、A群に比して回数は少ないが、医療療育、福祉の連携という面では親にとって利点も多い。C群はさらに離島のため地元での医療、療育、福祉サービスの低下はA、B群に比べ顕著である。質的、内容的に地域較差を縮める行政的配慮の必要性があることがわかった。

今回、B群（遠隔型）、C群（離島型）の地域における心身障害児の家族とそれぞれの地域の保

健婦を対象として療育システムの現状と今後の望ましいあり方についてアンケート調査を実施した。

2) 方法

心身障害児の家族、B群（北部地区67名、八重山地区29名、宮古地区30名）、C群（伊平屋村1名、伊江村5名、仲里村3名、粟国村1名、与那国町2名、竹富町2名、南大東村1名、伊良部町5名）とこれらの地区担当保健婦49名に対してアンケート調査を行った。

3) 結果

- ① 貴方の地元は心身に障害をもつお子さんにとって育ちやすい所だと思いますかについて。
- 家族にとって育ちやすい所だと答えたのは北部地区(12名、54.5%) 八重山地区(4名、37%) 宮古地区(4名、50%) 伊江村(3名、100%) 伊良部町(1名、100%)となっている。
- 逆に育ちにくいと答えた者が北部地区で(6名、27.2%) 八重山地区(5名、45.4%) 宮古地区

(4名、50%)、仲里村、与那国町、南大東村はそれぞれ1名づつとなっている。

育ちやすい原因について複数回答で調べた結果、北部地区では医療や発達相談がいつでも受けられるから、地元の人々の理解があるからが多く、次いで保育所には入れるから定期巡回療育があるから、保健婦の指導があるから、養護学校に入れるからとなっている。八重山地区、宮古地区はほぼ同じ理由で、定期巡回療育が行われているからというのが多く、次に地元の人々による理解、医療や発達相談が受けられるから、保健婦による指導があるから、養護学校や普通学校に入れるからとなっている。伊江村では保育所に入れるから、医療がいつでも受けられるから、地元の人々の理解があるから、保健婦の指導があるからとなっており、伊良部村では医療がいつでも受けられるから、地元の人々の理解があるから、保健婦の指導があるから、保育所や普通学校に入れるからと答えている。

逆に育ちにくい原因について複数回答で調べると、北部地区では僅かながら医療や発達相談がいつでも受けられないことをあげている。約半数が育ちにくいと答えた八重山地区と宮古地区においては、その理由として、医療や発達相談が少ないことや地元の人々の理解がないこと、保育所や普通学校に入れないこと等を挙げている。仲里村、与那国町、南大東村ではいつでも医療が受けられない、発達相談や定期巡回療育がないから人々の理解がないから、保育所・養護学校・普通学校に入れないからとしている。次に保健婦について家族と同様④について調べた結果育ちやすいと答えたのは、北部地区(12

名、64%)八重山地区(1名、33.3%)、反面育ちにくいと思っているのが北部地区(6名、31.5%)八重山地区(66.7%)宮古地区、伊平屋村、粟国村、与那国町、南大東村では全てが育ちにくいとしている。

育ちやすい原因について複数回答で調べた結果、北部地区では地元の人々の理解があるから、保育所に入れるから、定期巡回療育、発達相談が受けられるから、保健婦による指導があるから、養護学校や普通学校に入れること等をあげている。八重山地区では地元の人々の理解があるからと答えている。育ちにくい原因について複数回答でみると、北部地区では医療がいつでも受けられないこと、地元の人々の理解がないこと、発達相談や定期巡回療育が少ないこととなっている。八重山地区では医療、巡回療育、発達相談等の回数が少ないこととなっており、宮古地区でも同じ結果である。伊平屋村においても医療や巡回療育、発達相談がないからとしている。その他の粟国村、与那国町、南大東村でも医療や発達相談が受けられないことと、保育所や養護学校に入れないことをあげている。

㊤ 心身に障害をもつお子さんを地元で育てたいと思いますかについて。

家族において地元で育てたいと思うのは北部地区(19名、86.3%)八重山地区(10名、90.9%)宮古地区(8名、100%)伊江村(3名、100%)仲里村(1名、100%)伊良部町(1名、100%)となっている。反対に地元で育てたくないとした者が、北部地区(1名、4.5%)与那国、南大東村(1名、100%)である。それぞれの地元において障害児を育てていく場

合、どのような機関で医療、発達相談、訓練、言語治療、教育等を行ったらいと思うかについて複数回答で調べた結果、北部地区において、乳幼児については地元の保育所が良いとしたものが多く、次に地元の病院、心身障害児通園センター、保健所、養護学校、普通学校となり、学童児では普通学校が多く、次に養護学校、保健所、地元の病院でとなっている。

八重山地区では、乳幼児については地元の保育所が良いとしたものが多く、続いて普通学校、地元の病院、心身障害児通園センター、学童児では地元の病院、地元の普通学校が多く、次に保健所となっている。宮古地区では乳幼児は地元の病院、保育所、心身障害児通園センターが多く、次いで養護学校、保健所、普通学校、学童児では養護学校と普通学校が良い、次に保健所が良いとなっている。伊江村では乳幼児は保育所、普通学校、保健所で、学童児は普通学校が良いとしている。仲里村では乳幼児、学童児共病院が良いとしている。

地元で育てたくないと思った理由については、教育措置について子供にあった学校を地元で提供してくれず、遠方の養護学校を勧められ、家族は転居を余儀なくされていること。

僻地には専門の医療機関がないため、貧しい村の財政では専門施設が作られる可能性は何もないと思うので希望がもてず、障害の子供は遠い施設への入所しかないと結んでいる。保健婦について㊦について調べた結果、保健婦にとっては地元で育てたいと考えている者は、北部地区(15名、79%)八重山地区(2名、66.7%)宮古地区、伊平屋村はそれぞれ(3名、1名で100%)。

地元で育てていく場合、障害児の医療、発達相談、訓練、言語治療、教育等についてどのような機関で行ったら良いかを複数回答で調べた結果、北部地区では乳幼児は地元の保育所が良いとしたものが多く、続いて地元の病院、保健所、心身障害児通園センター、地元の養護学校、普通学校の順となっている。学童児は普通学校が多く、養護学校、地元の病院、保健所の順となっている。八重山地区では乳幼児は心身障害児通園センターと保育所が多く、学童児では地元の養護学校でとなっている。宮古地区では乳幼児においては心身障害児通園センターが多く、次いで地元の病院、地元の保育所、学童児は地元の普通学校の次に地元の病院、養護学校、保健所となっている。与那国町では乳幼児は地元の保育所と養護学校、心身障害児通園センターで学童児は地元の普通学校が養護学校となっている。伊平屋村では乳幼児は地元の病院、地元の保育所、普通学校が良いとしている。

地元で育てたくないと思った保健婦の意見として、地元で育てたくても専門医療機関がなく、100人の子供の中で唯一障害をもった子に対して地元の人々も理解していないことや中学校まで特殊学級に通っていてもその後の教育の受け皿が地元にはないからとしている。

㊦ 現在、障害児のことで困っている点について。

*家族にとって困っていること

運動面、知的面、言葉の面での遅れがあるという現実には認識しているものの、早期療育が叫ばれる中、何一つ子供にしてやれない不安と不満の中にあること。

日常的に診てもらえる、相談してもらえる、訓練してもらえる専門家が身近にいないこと。離島においては6カ月に1回の割で巡回療育をしてほしい。

*保健婦にとって困っていること。

常駐の理学療法士、言語治療士、心理判定員がいないこと。心身障害児通園センターがなく、そこを拠点とした統合教育が進められないこと。

巡回療育の回数がどの地区においても少ないこと。

小さな島の中で医療者間で子供の発達段階を親に素直に説明することをためらい、特別の施設に入所させれば良いという雰囲気があること。離島には養護学校がないため、就学の方向づけで心労し、結局は本島での入療を余儀なくされ、家族の経済的負担も大きい。

4) 考 察

沖縄県の心身障害児の医療、療育、福祉の現状は、B群：遠隔型、C群：離島型では、定期巡回療育の実施により、医療、療育、福祉の専門家が一同に会することで家族への利点も多く、ひいては地元の人々の障害に対する理解度を高めている。反面、一部地域においては定期巡回療育の割合の問題や巡回療育が行われていない離島などについては、不安、不満は否めず、地元の人々の定期巡回療育への期待は大きい。よって関係機関の有機的連携の機能の強化が必要であろう。

各地域共、障害児の子育ては地元で行っていきたいとの希望は強い。乳幼児に関しては保育所、学童児に関しては学校を中心として総合的な療

育を受けたいと望む者が多い。

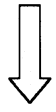
保育所、学校における統合教育を拠点としながら子供の障害の程度、家族や地域の実情にあった既存の施設での療育環境の機能強化を図る必要があると思われる。

5) ま と め

- ① (B群：遠隔型、C群：離島型)に居住している心身障害児とその家族、及びそれぞれの地区担当の保健婦に対して療育システムの現状と今後の望ましいあり方について調査した。
- ② B群については定期巡回療育の効果は認めつつも、日常的に療育を受けたいとする声が高かった。
- ③ C群について定期的に巡回療育の必要性がある。
- ④ 地元で障害児を育てていくためには、保育所や学校を拠点とした統合教育を望む声が高かった。併せて障害の程度、家族の対応、地域の実情にあった療育環境の充実、強化を図る必要がある。

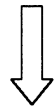
<提 言>

1. 乳検、1歳6カ月検診、3歳検診と保健所、訓練施設を連携した一貫したシステムが必要である。
2. 遠隔地では保健所を中心に巡回療育相談を実施すると同時に、地元の小規模通園センターの設置が望ましい。
3. 離島では保育所内に療育可能な場所を確保し、定期的に巡回療育を実施する。
4. 遠隔地、離島では心身障害児すべてが保育所、学校に入れるよう、地域の理解が高まる必要がある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1)はじめに

沖縄県は乳幼児検診、1歳6ヵ月検診、3歳児検診の事後指導として各保健所内に発達クリニックを設置し、訓練の必要な乳幼児には地域の訓練施設に紹介している。訓練施設のない遠隔地域(北部地区、宮古諸島、八重山諸島)には保健所内に統合療育外来として訓練スタッフを派遣して巡回療育訓練を実施してきた。

昨年は沖縄県の心身障害児の医療、療育、福祉の連携状態について3つに分け(A群:都市型、B群:遠隔型、C群:離島型)比較検討した結果、A群ではスタッフ、療育内容、福祉共充足している。B群では定期巡回療育が主であるが、A群に比して回数は少ないが、医療療育、福祉の連携という面では親にとって利点も多い。C群はさらに離島のため地元での医療、療育、福祉サービスの低下はA、B群に比べ顕著である。質的、内容的に地域較差を縮める行政的配慮の必要性があることがわかった。今回、B群(遠隔型)、C群(離島型)の地域における心身障害児の家族とそれぞれの地域の保健婦を対象として療育システムの現状と今後の望ましいあり方についてアンケート調査を実施した。